

第1期中野区子どもの権利委員会最終答申(たたき台)

令和6年(2024年)5月

第1期中野区子どもの権利委員会

## はじめに ～最終答申に当たって

---

諮問から最終答申までの経過等を記載予定。

- ・諮問
- ・子どもの権利条例
- ・こども基本法
- ・中間答申の取りまとめ
- ・意見聴取
- ・子どもはまちづくりのパートナー  
など

令和6年（2024年）5月●日  
第1期中野区子どもの権利委員会  
会長 内田 塔子

## <目次>

|     |                          |   |
|-----|--------------------------|---|
| 1   | 子どもの意見表明・参加に関する提言        | 1 |
| (1) | 子どもの意見表明・参加の考え方          |   |
| (2) | 子どもの意見表明・参加を推進していく上での課題  |   |
| (3) | 子どもの意見表明・参加の進め方          |   |
| (4) | 子ども会議のあり方                |   |
| (5) | 子どもの意見表明・参加の推進           |   |
| 2   | 推進計画及び取組の評価・検証の仕組みに関する提言 |   |
| (1) | 評価・検証の仕組み                |   |
| (2) | 評価・検証における視点              |   |
| (3) | 子どもの意見を踏まえた評価・検証         |   |

## <付属資料>

付属資料1  
付属資料2  
付属資料3  
付属資料4  
付属資料5  
付属資料6  
付属資料6

諮問文、中野区子どもの権利に関する条例及び条例  
施行規則、名簿、開催状況などを添付予定

# 1 子どもの意見表明・参加に関する提言

## (1)子どもの意見表明・参加の考え方

当委員会では、令和4年8月に取りまとめた中間答申を踏まえ、子どもの意見表明・参加の基本的な考え方や意義について、以下のとおり整理しました。

### ① 子どもの意見表明・参加の基本的な考え方

#### 子どもはまちづくりのパートナー

- 子どもは、一人の区民であると同時に、子どもにやさしいまちをつくるためのパートナーです。子どもには、家庭、学校、地域社会など、日常のあらゆる場面で、子どもに関係するあらゆる事柄について、意見を表明し尊重される権利があります。
- 区は、子どもに関する様々な取組への子どもの参加の機会を確保し、子どもの意見を施策の推進や施設の運営に反映していくことが必要不可欠です。

#### 子どもの「意見」とは

- 子どもの権利条約第12条<sup>1</sup>は、年齢を制限する考え方ではなく、まだ言葉で自分の意見、考え、思いを表現できない年齢の子どもであっても、表情や身振り、遊びなどを通じて、自分の気持ちや望みを大人に伝えていることを前提としています。したがって、子どもの年齢を問わず、子どもの表情や身振り、遊びなどの非言語的コミュニケーションを通じて、言葉では表現されない子どもの気持ちや望みを受け止め、尊重していくことが重要です。
- 理路整然とした意見だけが、大人が聴き、尊重する対象の意見ではありません。子どもに意見を述べる能力を求めるのではなく、例えば就学前の子どものつぶやきなども含めて、大人には子どもの声を聴く力が求め

<sup>1</sup>子どもの権利条約第12条：第1項「締約国は、自己の見解をまとめる力のある子どもに対して、その子どもに影響を与えるすべての事柄について自由に自己の見解を表明する権利を保障する。その際、子どもの見解が、その年齢および成熟に従い、正当に重視される。」

第2項「この目的のため、子どもは、とくに、国内法の手続規則と一致する方法で、自己に影響を与えるいかなる司法的および行政的手続においても、直接にまたは代理人もしくは適当な団体を通じて聴聞される機会を与えられる。」（国際教育法研究会訳）

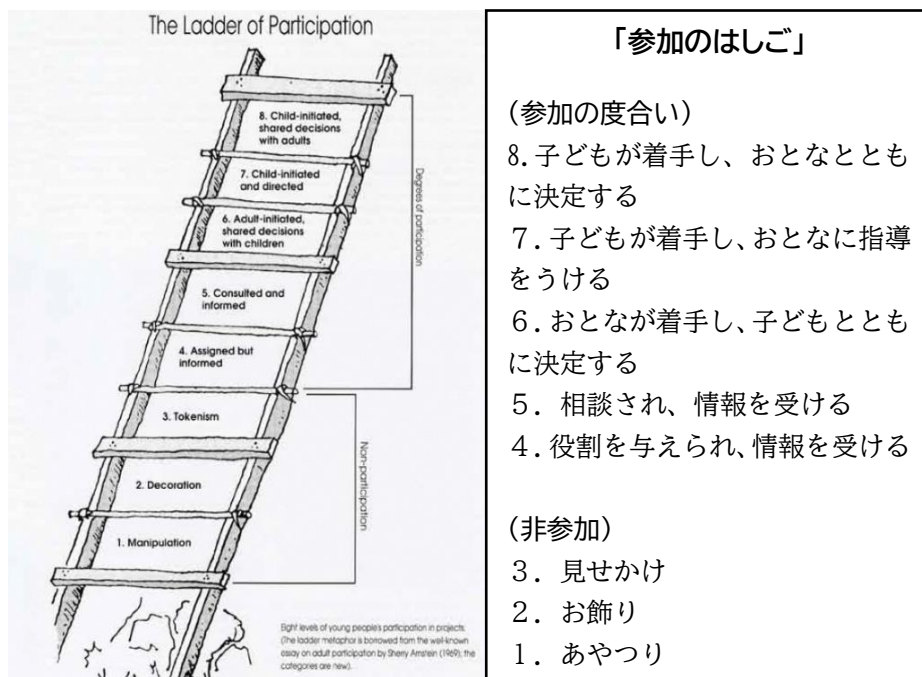
られています。

## 正当な考慮と反映

- 子どもの意見を聴くことは、子どもの言いなりになることではありません。子どもの意見は正当に考慮され、その反映については、施策の目的や子どもの年齢、発達段階、実現可能性、予算や人員などの制約も考慮しつつ、子どもの最善の利益を実現する観点から判断する必要があります。
- 子どもの意見を反映することが難しい場合は、一度意見を受け止めた上で、できない理由を伝えるなど、子どもへの丁寧な説明や十分な対話が必要です。

## 参加のあり方

- アメリカの心理学者ロジャー・ハートが提唱した「参加のはしご」の考え方では、子どもが社会に参加する段階を8つに分け、「あやつり」「お飾り」「見せかけ」の参加はそもそも参加ではなく、4段目の「役割を与えられ情報を受ける」からが参加であり、段を上がるごとに子どもの参加の度合いが高まり、8段目は「子どもが着手し、おとなとともに決定する」とされています。
- これは常に8段目で子ども参加を実践しなければならないということではなく、状況に応じて適切に参加のあり方を選択していく考えが重要です。

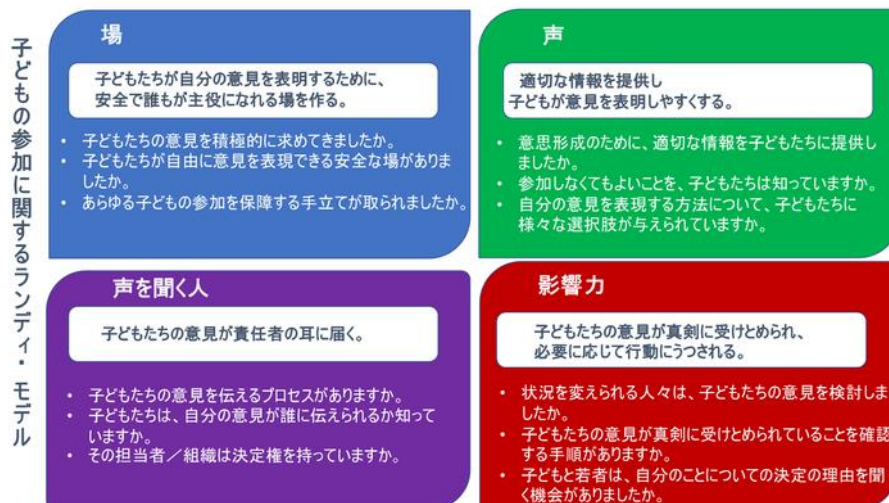


(引用)

Hart, R. (1992), *Children's Participation : from Tokenism to Citizenship*, Florence, UNICEF Innocenti Research Centre

## 「子どもの参加プロセス」の自己評価

- クイーンズ大学ベルファスト・子どもの権利センターのローラ・ランディ教授が提唱した「ランディ・モデル」では、子どもを中心にした意思決定プロセスに必要な要素（①場、②声、③声を聞く人、④影響力）が時系列で整理されています。このモデルは、子どもに有意義な発言機会を提供するための手順が示されており、このモデルを使うことで、関与する大人が「子どもの参加プロセス」を自己評価することができます。
- 子ども参加を実践する際は、こうした具体的なチェックリストを利用することで、より有効かつ有意義な子ども参加を行うことができると考えます。



## 意見を「聴いてもらえる」権利

- 子どもには、意見を表明し、その意見が尊重される権利があります。それは、意見を「聴いてもらえる」権利があるということです。日常的に子どもの意見を「聴く」ということを、子どもにきちんと伝えることが大切です。

## ② 子どもの意見表明・参加の意義

### 子ども自身への効果

- 子どもに関する様々な取組への子どもの参加の機会を確保し、子どもの意見を施策の推進や施設の運営に反映していくことは、施策や施設が子どもの最善の利益を確保するものになるだけでなく、子どもの意見が尊重され、反映されていく経験が、子どもの自己肯定感や自己効力感、主体的にまちづくりに関わる意識（主権者）につながっていきます。

### 大人への効果

- 子どもには、大人とは違う視点や発想があります。子ども自身が中野区に住んでいてよかったと思えるような場面をつくっていくこと、区民の一員であることを実感できることが、子どもの新しい視点や発想を生み出し、まちをよりよいものにしていくことにつながります。さらに、そうした取組を行うことにより、大人自身も子どもに対する見方が変わり、子どもが「保護の対象」ではなく「まちづくりのパートナー」であるという認識が広がっていきます。
- 大人が子どもにとって良かれと思いがち行なうことが子どもの気持ちや望みに合致しない場合、効果的な支援に結びつかないことがあります。子どもの意見表明・参加を進めることは、大人の良かれという思い込みやズレに気づくことができ、そこから有効な支援や取組を行っていくことにつながります。

## (2)子どもの意見表明・参加を推進していく上での課題

当委員会では、子どもの意見表明・参加を推進していくにあたり、各委員がそれぞれの立場で把握している現状や課題について、以下のとおり整理しました。

### ● 現状と課題

#### 自己の意見を表明しにくい子ども

- 自分に保障されてしかるべき権利を知らないために、権利侵害に無自覚であることから、意見を出さない子どももいます。子ども自身にどのような権利が保障されてしかるべきなのかを伝えることが必須であると考えます。
- 子どもは、大人から評価されることへの「恐れ」を抱いていることがあります。大人と違う意見を述べることに對し、反抗していると受け止められてしまったり、評価が低くなってしまうかもしれないと感じたりして、本音が言えずに大人の意見に同調してしまうことがあります。また、意見を伝えることに對して「言っても変わらない」という「あきらめ」の気持ちを抱えている子どももいます。
- 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に変更となり、子どもたちの生活様式や活動が徐々に従来の形に戻り、子どもが発言をしたり、行事等に参加したりする機会が増えた一方で、意見を表明できる子どもとそうでない子どもとの差が目につく機会が増えたように感じます。自分の意見、考え、思いを表明することが苦手であったり、困難であったりする子どもの意見表明を保障する仕組みや機会が必要であると考えます。

#### 忙しい子どもたち

- 子どもたちは、学校以外にも、塾や習い事、部活動など、様々な活動に時間を費やし、忙しい日々を過ごしています。子どもに意見を聴く場合は、子どもの状況や学校行事等を考慮した上で、子どもが参加しやすい時期や時間帯を設定する必要があります。



## 大人が意識的・無意識的に設けている「枠」

- 大人は、子どもを思うあまりに、子どもが失敗しないよう、アドバイスと称して、子どもの自由な発想や思い・考えを聴かずに、先回りして手助けをしたり、大人の考えを伝えたりしてしまう場合があります。
- 子どもが思いや考えを表現する機会を奪ってしまっていないか、子どもの意見を受け入れるにあたり許容範囲を設けていないか、大人が改めて意識することが重要です。さらに、大人の想定を超えた子どもの意見が出されたときに、柔軟に対応していく大人側の受け止めの柔らかさも必要です。

## 子どもや保護者と関わる専門職が抱える負担

- 子どもや保護者と関わる専門職自身に余裕がないために、時間をかけて子どもの思いや考えを聴けなかったり、遮ってしまったりする場合があります。
- 子どもの意見表明・参加を推進していくためには、保護者をはじめ、子どもと関わる周囲の大人の負担感や悩みを軽減するような手立ても併せて講じていくことが重要です。

## 大人の理解不足

- 子どもの権利に対する大人の理解が不足しているために、子どもの意見表明・参加の取組が進まない場合があります。子どもの権利に関する広報・啓発を活発に行い、子どもの権利を正しく伝え、理解の浸透を図っていく必要性があります。

## 意見を聴く大人側の知識・経験・スキル不足

- 大人には、子どもの意見を聴く力が求められますが、大人側の知識や経験、スキルが不足しているために、子どもの意見を十分に聴くことができていない場合があります。
- 子どもの意見の聴き方や、子どもの言葉にならない思いを含めた本音を引き出すスキルを大人が学べる研修などを行うことが効果的であると考えます。

## 異年齢・多世代との出会いや交流の機会の必要性

- 異年齢・多世代と出会う機会や、子どもが自分らしい時間を過ごせる場所・環境、自分らしく過ごすことを受容してくれる大人と交流する機会が少なくなっているように感じます。子どもは、安心して話せる人だという実感がなければ、相談したり、悩んでいることを吐露したりするにしても、話すことができません。そうした人と日常生活の中で出会い、交流できる場や機会が求められています。

### (3)子どもの意見表明・参加の進め方

当委員会では、子どもの意見表明・参加を進めていくにあたり、子どもの意見の聴き方や意見を聴く場面について、以下のとおり整理しました。

#### ①子どもに意見を聴く際の心構えや留意点

##### ▶ 意見を聴く前に

##### 十分な情報提供

- 子どもに意見を聴くときは、何のために意見を聴くのか、聴いた意見がどのように活かされるのかなど、意見を聴く目的や子どもの役割等を子どもに分かりやすく、丁寧に伝えることが重要です。
- 子どもが意見を求められたときに、それに対して十分に発言できるよう、子どもに分かりやすい情報提供を行ったり、学習の機会を確保したりする必要があります。
- 意見を聴くにあたり、子どもには権利があること、中でも意見を表明する権利があることを子どもにしっかりと伝えることが大切です。子どもが悩みや不安を抱えている場合も想定し、相談できる場所や子どもの居場所をあわせて案内するなどの工夫も必要です。
- 意見表明の機会は、機会そのものが創出されると同時に、その存在や方法が子どもに認知されなければ、機会が確保されたことになりません。このため、様々な機会を捉えた子どもへの周知広報を行うことが大切であると考えます。

##### 子どもの生活に関連したテーマ設定

- 子ども参加は、子どもが個々に持っている知識や能力、経験、情報、洞察力などを生かせるものでなければなりません。子どもが持っている知識や能力、経験などを活かせるよう、子どもの生活やコミュニティに関連したテーマ設定を行うことが重要です。

## ▶ 意見を聴くときに

### 権利であって義務ではないこと

- 子どもの意見表明・参加は権利であり、義務ではありません。子どもの意思や判断で「話したくないことは話さなくてよいこと」、「いつでも中断できること、中断しても何ら不利な状況には置かれること」を子どもにきちんと伝える必要があります。

### 子どもの不安感や恐怖心を取り除くこと

- 子どもは、大人からの評価を気にしていたり、「正しい意見を言わなくてはいけない」といったプレッシャーを感じたりしている場合があります。そうした不安や恐怖を感じる必要はないということ、どんなことを話しても良いということ、秘密は守るということを言葉で伝える必要があります。
- 腕組みや足組みをしない、きちんと体を向き合わせる、視線を合わせて同じ目線で話を聴くなど、子どもに不安や恐怖を感じさせないように、話を聴くときの態度や表情にも気をつけたり、聴くタイミングに注意して、子どものペースで待ったりすることも大切です。

### それぞれの状況に応じた配慮

- 子どもの意見を聴く際は、子どもの年齢や発達段階、特性に応じた配慮を行う必要があります。
- 病気や障害、日本語以外が母語である場合や外国にルーツのある子ども、LGBTQ の子どもなど、自分の思いや意見を言葉や態度で表出することに困難がある子どもたちに対して、それぞれの状況に応じた配慮を行う必要があります。

### 意見の尊重

- 子どもの意見は、尊重して扱われなければなりません。前提を覆す意見にもまずは耳を傾けます。大人が考えつかなかったようなアイデアに対して、否定せず受け止める柔軟性が大人に求められます。

- 子どもの気持ちや思いの表現方法は言葉だけに限らず、絵、ダンス、表情など、あらゆる形態があります。様々な形で表出される子どもの思いや気持ちを受け止め、尊重することが重要です。

### 意見を表明しやすい環境づくり

- 子どもにとって参加することが楽しいと思えるような配慮をすることが重要です。子どもがリラックスできて、居心地が良いと感じる場所で行うことや、休憩を多くとること、おやつや飲み物を用意するなどの工夫が求められます。
- 子どもが安心して意見を表明しやすい環境づくりを行うにあたり、例えば声が漏れにくいような場所を用意するなど、物理的な環境整備も重要です。大人には、子どもの目線で話しやすいと思える環境をつくる視点が求められます。
- 子ども自身が意見を言うことが困難な場合を想定して、子どもの意見を代弁し、意見表明・参加を支援するために、子どもオンブズマン制度の活用などファシリテートする仕組みとともに、ファシリテーターの養成を検討していくことも必要です。

### 子どもが答えやすい聴き方の工夫

- 行政計画など、子どもにとってあまり身近でない事柄について意見を聴くときは、子どもの年齢に応じて、子どもや子どもの日常生活に関係のあることについて設問を用意して聴くなど、子どもが答えやすい聴き方で工夫する必要があります。

### ▶ 意見を聴いた後に

### 結果のフィードバック

- 子どもの意見を聴いた後は、意見を聴きっぱなしにせず、聴いた意見をどのように受け止め、どう反映させたか、意見が反映されなかった場合はその理由等を子どもに分かりやすい形でフィードバックすることが重要です。また、単なる結果や決定の理由のみをフィードバックするのではなく、大人が悩んだ過程や決定に至るまでのプロセスをあわせて伝えたり、どうしたら良いかを子どもと一緒に考えたり悩んだりする場を作ることも有効であると考えます。

- 子どもにとって、「意見を聴かれた結果、何か変わったな」ということを子どもが実感できることは重要です。この実感により、意見を表明する子どもの意識も変わり、それが更なる参加意思の醸成につながります。

## ②子どもに意見を聴く際の心構えや留意点子どもの意見を聴く場面

### ▶ 日常の中で

- 子どもは、日々の日常の中で思いや気持ちをつぶやいています。家族会議や学校のホームルームなどの改まった場面において聴く意見だけではなく、日頃の生活の中で子どもから出てくるつぶやきを拾い上げて聴くことが大切です。
- 子どもの意見表明・参加は、一時的に、また形式的にその機会を用意するだけでは保障したことになりません。子どもの参加にあたっては、必要な情報を事前に子どもに分かりやすい表現で共有すること、子どもが自発的に参加していること、子どもが意見表明しやすい環境を整えること、子どもの意見をその後どのように反映させたか子どもにフィードバックすることなどを、子どもに関わるあらゆる場面で日常的に保障していく仕組みを用意する必要があります。

### ▶ ワークショップ

- 開催にあたっては、アイスブレイクを行う、会場内の飾り付けを行う、ファシリテーターを配置するなど、子どもがリラックスできて、話しやすい環境づくりを行うことが重要です。
- 開催時間が長い場合には、休憩を多くとることや、長時間の議論で疲労したときには体操やストレッチをして気分転換を入れるなど、子どもが疲れしないような配慮を行うことが大切です。
- 子どもの状況や学校行事等を考慮した上で、子どもが参加しやすい時期や時間帯を設定することが重要です。
- 子どもが気軽に参加しやすいよう、オープンハウス形式（時間内において、都合の良い時間に誰でも参加できる形式）で実施することも有効であると考えます。

### ▶ ヒアリング

- 聴き取った内容を記録するフォーマットを用意し、聴き手による結果の差が生じないように配慮することが大切です。
- 子どもの本音を引き出すには、本題に入る前に、雑談などを通して子どもと信頼関係を築くことが大切です。雑談の中から子どもの思いや本音が出てくることも考えられます。
- 必要に応じて、子どもの支援者（施設職員等）に、ヒアリングの対象となる子どもの選出やヒアリングのサポート等の協力を依頼して実施するやり方も考えられます。
- その場では意見が出なくても、子どもが後から意見を伝えなくなったときに伝える手段や方法を用意することも重要です。

### ▶ アンケート

- 紙媒体、WEB媒体の両方を活用し、子ども自身が回答方法を選択できることが望ましいと考えます。
- 回答する子どもの年齢に応じて使用する漢字や言葉づかいに配慮したり、ふりがなを振ったりする必要があります。

## 子どもの意見表明・参加の事例 【計画策定にあたる子どもへの意見聴取】

### 中野区子ども総合計画の策定にあたる子どもへの意見聴取(令和4年度)

- 子どもの希望などに合わせながら、ワークショップ、ヒアリング、アンケートいずれかの形式により実施した(対象:乳幼児～高校生 計152名)。実施においては、子どもに関連する施設や子どもの居場所等で意見を聴くことに加え、個別の支援を必要とする子どもに対して意見を聴取し、結果を計画の内容に反映させた。
- 児童館等において、中野区子ども総合計画(素案)に係る子ども向け意見交換会を実施した(対象:小学生～高校生 計58名)。聴取した子どもの意見については、計画(案)に反映させ、また、意見交換会の実施結果(主な意見とそれに対する区の考え方)を子ども向けにまとめ、子どもにフィードバックした。
- 策定した計画については、「子ども向け概要版」を作成し、計画が子どもにとっても分かりやすいものとなるよう工夫した。



▲区内保育園で乳幼児にヒアリングを行っている様子



▲子ども総合計画(素案)の子ども向け意見交換会の様子

### ③ 子どもの積極的な参加を促すには

#### 子どもに分かりやすい情報提供、情報発信

- 子どもに情報提供を行う際は、子どもにやさしい言葉に置き換えて説明する、子どもに分かりやすい資料を用意するなど、子どもが意見を出しやすいような工夫をする必要があります。

#### 参加しづらい子どもへの支援

- 障害や外国にルーツのある子ども、LGBTQの子どもなど、地域には多様な個性や背景を有する子どもや、乳幼児や不登校の子ども、児童養護施設に入所している子ども、里親家庭で暮らす子ども、ヤング



ケアラーなど、意見を表明することに困難を抱える子どもがいます。また、意見を伝えることに対して緊張してしまう子どもや、自分の意見を言語化することが苦手な子どももいます。声をあげることができない、あげにくい子どもの意見や思いを受け止めるために、対面、アンケート、WEB（オンライン）、SNS、カードゲーム等の身近な遊びなど、幅広い方法を活用し、誰一人取り残すことなく、意見を受け止める機会を確保する必要があります。

#### 他の人の意見を聴く場に参加する権利

- 子どもには、「他の人の意見を聴く場に参加する権利」があります。意見を表明できなくても、他の人の意見を聴く場に参加することで、自分の思いや考えを改めて意識したり、表明できたりするという場合もあります。他の人の意見を聴くことができる場を確保することが重要です。

#### 参加にあたっての経済的・物的支援

- 子どもが参加しやすいよう、交通費を支給する、謝礼としてノベルティグッズ等を用意するなど、参加にあたっての経済的・物的支援を考えたり、そのための予算を確保したりすることも必要であると考えます。

## (4)子ども会議のあり方

子ども会議は、条例第14条に基づき、区の子どもに関する計画や子どもが必要だと思うことについて意見をまとめ、区長に提出することができる会議です。子どもたちの代表として、また区民として子どもが区に意見を伝えることができる重要な場でもあります。

### 意見の尊重とフィードバック

- 行政は、子ども会議で行われた活動や議論または提出された意見を、まちづくりのパートナーである子どもの意見として尊重する必要があります。子ども会議の議論や意見をどのように受け止め、どう反映させたかを子どもに分かりやすい形でフィードバックすることで子どもは参加したことに意義を感じ、それが更なる参加意思の醸成につながります。また、こうした子どもとの対話が日常的に行われることが望ましいと考えます。

### 子どもから若者への正の循環

- 子ども会議の参加者が成長して若者となったとき、子ども会議の支援者やサポーターとなり、子どもを支える役割を担ってもらえるような、正の循環が生じるような運営方法や仕組みの検討が望まれます。

### 会議に参加する子どもに意見を求めるとき

- 子ども会議に参加する子どもに意見を求める場合も、いきなり意見を聴こうとするのではなく、子どもがリラックスできて、意見や思いを伝えやすい環境づくりや配慮を行う必要があります。

### 様々な場面での子ども会議

- 子ども会議に参加する子どもの数は、区内の子どもの数からすると一部です。しかし、子ども会議の取組を周知し、こうした子ども参加が行われていることを子ども会議に参加していない子どもや大人に知ってもらうことが重要です。こうしたことを通じて、子ども会議が、家庭、学校、地域などに広がることが期待できます。

- 子ども会議を地区ごとに開催したり、テーマを設定してスポットごとに開催したりするなど、様々な単位の子ども会議が様々な場所で行われることで、子ども会議が地域により浸透していくと考えます。

#### 多様な子どもの参加を促す工夫や仕組み

- 子ども会議への参加にあたっては、一部の子どものみに参加者が偏らないよう、多様な参加者を受け入れる環境を整えるとともに、子どもが参加しやすい、参加したいと感じる仕組みをつくることが大切です。

#### より子どもの意見が反映される仕組みとするために

- 中野区では、現在、条例第14条に基づく子ども会議としてハイティーン会議を位置づけています。ハイティーン会議は中高生年代を対象としているため、小学生以下の子どもが参加できる子ども会議について検討を行う必要があると考えます。

## 子どもの意見表明・参加の事例 【子ども会議】

### **ハイティーン会議**

- 中野区在住・在学・在勤の中高生世代が、学校や学年を超えて興味・関心のあるテーマについて議論や調査を行い、意見表明に繋げていくワークショップとして実施している。
- 中野区子どもの権利に関する条例第14条に基づく「子ども会議」として、子どもに関する区の計画等について、区がハイティーン会議に参加する子どもに意見を求める。
- 令和4年度より、子ども・若者支援を行う NPO 団体に運営を委託し、また、令和4年度に新設された「若者会議」と連動し、より多世代、より地域に密着した会議として、自主的・自発的な活動や地域参加などの具体的取り組みにつなげている。



◀ 令和5年度ハイティーン会議の様子

## (5)子どもの意見表明・参加の推進

家庭、学校、地域、区政などのあらゆる場面において、様々な特徴を持った子どもが様々な方法で多様な意見を表明し、積極的に参加できるよう、その仕組みづくりや取組を進める必要があります。

当委員会では、子どもの意見表明・参加の推進について、以下のとおり整理しました。

### 子どもの意見表明・参加の仕組みづくり

- 子どもには、家庭、学校、地域、区政など、日常のあらゆる場面で、子どもに関係する事柄について、意見を表明し尊重される権利があります。学校をはじめ、公園や図書館などの公共施設の意見表明・参加の仕組みを子どもの権利の視点から見直すとともに、意見表明・参加の仕組みを持たない場合は、利用する子どもたちの意見が日常的に集約され、反映されていく仕組みを新たに作る必要があります。

### 区政運営における子ども参加

- 区政への提案や、区の計画策定等における区民意見交換会は、子どもの参加を排除するものではありません。子どもをパートナーとして、機会を捉えてこれらに対する子どもの参加を促進するとともに、子どもに分かりやすい情報提供・情報発信を行う必要があります。

### 子ども施設の整備・運営への参加

- 子どもたちが日常的に利用する児童館などの子ども施設においては、運営委員会に子ども委員を設け、利用に関して大人だけでなく子どもにもアンケートをとるなど、子どもが様々な方法で意見を出せる機会を作る必要があります。
- また、区が現在進めている中高生年代向け施設の整備の検討に当たっては、当事者である子どもたちの意見を聴きながら進めていく必要があると考えます。

## 子どもの意見を反映させた学校運営

- 学校においては、子どもが表明した意見、考え、思いを尊重し、子どもの意見等を生かした活動や環境改善を実施することで、子どもがより達成感や成就感、自己肯定感、他者とのつながり等を高めることができ、意見表明・参加の促進につながると考えます。

## 子ども参加の範囲

- 子どもが意見表明・参加を行うことができる範囲は、家庭などの子どもにとって身近で小さな範囲から、行政における子ども会議などの大きな範囲まで、様々な範囲で用意されている必要があると考えます。子どもの意見表明・参加は、家庭から始まり、学校や地域など、子どもの日常や生活圏の様々な場所・場面で行われることが大切です。

## 大人への働きかけ

- 子どもの積極的な参加を促すためには、大人が子どもの意見を積極的に聴くようになるための働きかけも必要です。子どもは、自分や社会のことについて、大人が想像しているよりも幅広く、また深く考える力があります。子どもの意見表明・参加の事例を大人に向けて発信することは、そのような子どもの力を知り、子どもの意見表明・参加に対する大人の理解の促進につながります。
- 大人への働きかけを行うに当たっては、子どもの意見表明・参加に関して勉強会を行うなど、学ぶ機会を設ける他、実際に子どもと活動したり、同じ時間を共有したりするなど、参加型で「子ども参加」を実践することにより、子どもの意見表明・参加の意義を実感として理解することができ、必ずしも子どもの権利に対する理解が十分でない大人に対しても効果的に意識啓発を行うことができると考えます。

## 大人自身の意見表明・参加の重要性

- 子どもの意見表明・参加を推進していくにあたり、周りの大人自身が意見表明・参加を実践していなければ、子どもは安心して意見表明・参加に取り組むことが難しくなると考えます。大人自身が日頃から意見表明・参加に取り組んでいる姿を子どもに見せることも大人としての責務であると考えます。「子ども参加」を特別扱いするのではなく、

子どもを含めた区民がきちんと参加できる環境を整えることが不可欠です。

### 大人や社会が意見を受け止める必要性

- 子どもの意見表明・参加の推進に当たっては、子どもの意見を「聴く」というだけではなく、まずは、大人や社会が子どもの意見を「受け止める」ことも重要です。子どもの意見や思いを受け止めることの重要性に理解を示す機会が必要であると考えます。

### 子どもとの信頼関係の構築

- 子どもの意見を丁寧に聴くためには、可能であれば、回数を重ねて信頼関係を構築する場を用意することで、子どもからの多様な意見を引き出すことができると考えます。

### 学校における啓発

- 子どもが1日のうちで多くの時間を過ごす学校において子どもの権利について学習する機会を設けることで、子どもが自分に保障されてしかるべき権利を知り、意見を表明したり、参加したりできるようになると考えます。また、学校を拠点とすることで、地域の大人も参加しやすくなり、子どもの意見表明・参加を推進する機運を効果的に醸成することができると考えます。
- 学校において子どもの権利に関する学習を行う際は、授業で活用できる副読本を作成する、外部リソースを用いるなど、学校の教職員や学習に携わる大人に対して必要な支援やサポートを行いながら充実をはかっていくことが重要です。

### 日常的に子どもの意見を聴く大人への支援

- スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、特別支援教育支援員など、日常的に子どもの意見を聴いている専門職の状況を把握し、それぞれが抱える課題に応じた支援を行うための体制や環境づくりを行うことが重要です。

## 子ども参加を支援する団体等との連携・協働

- 区内には、子どもの意見を聴く活動を行っている団体や民間事業者、NPOなどの地域資源が多く存在することから、これらの様々な主体と連携し、子どもの意見表明・参加を促進していくことが大切です。

## 取組の評価・検証

- 意見聴取の仕組みが適切に機能しているかをモニタリングし、評価することも大切です。意見聴取という定性的な状況把握だけでなく、定期的な実態調査を行うことで、定性的、定量的な評価を行い、子ども目線での改善を継続して行う必要があります。

## 子どもの意見表明・参加の事例 【子ども相談室の運営における子どもへの意見聴取】

### 子ども相談室の愛称及びキャラクターの選考にあたるワークショップ（令和5年度）

- 子ども相談室の愛称及びマスコットキャラクターの選考にあたり、「愛称・マスコットキャラクター選定メンバー」を募集し、ワークショップを通して、子どもの意見を聴き、選考を行った。
- 決定した愛称・キャラクターは、「子どもの権利の日フォーラムなかの2023」で発表し、作者の表彰を行った。
- ワークショップでは、決定した愛称・キャラクターを活用した普及啓発についても検討を行い、子どもからノベルティグッズ案について意見を聴取した。
- 実施にあたっては、会場内の飾り付けを行ったり、アイスブレイクを行ったりした他、年齢の近い大学生に各グループ2～3名にサポートで入ってもらい、子どもがリラックスして意見を表明できる雰囲気づくりを行った。



▲ワークショップの様子



▲子どもたちの選考により決定した子ども相談室「ポカコロ」とマスコットキャラクター「だんごーず」



## 子どもの意見表明・参加の事例 【まちづくりにおける意見聴取】

### **西武新宿線沿線まちづくりにおける出前授業（令和5年度）**

- 子どもにまちづくりを身近に感じてもらい、子どもから直接意見を聴くため、まちづくり整備方針の対象地域内にある小学校で出前授業を行った(対象:小学6年生計250名)。
- 3つのテーマ(「困っているところ、改善してほしいところ」、「まちにどんな場所や施設がほしいか」、「将来どんなまちになってほしいか」)について子どもに考えてもらい、合計 1,786 件の意見を聴取した。
- 一人一人の子どもから多くの意見を出してもらうために、子どもたちに意見を書き出してもらった。
- 子どもからの意見は、「まちづくり整備方針」等の計画へ反映していく。



▲出前授業の様子

#### 自分たちのまちを、考えてみよう

##### 考えてみよう

学校や野方駅の周りを思い浮かべながら、  
3つのテーマについて考えてみよう

- ① 困っているところ、改善してほしいところ
- ② まちにどんな場所や施設がほしいか
- ③ 将来どんなまちになってほしいか



## 2 推進計画及び取組の評価・検証の仕組みに関する提言

### (1) 評価・検証の仕組み

当委員会では、推進計画及び取組の評価・検証の仕組みについて、以下のとおり整理しました。

#### 評価・検証の流れ

- 中野区では、子どもに関する5つの法定計画（①子ども・子育て支援事業計画、②次世代育成支援行動計画、③子どもの貧困対策計画、④子ども・若者計画、⑤条例の推進計画）を包含する総合的な計画として中野区子ども総合計画（以下「計画」といいます。）を策定しています。計画全体の実施状況や成果指標の達成状況については、中野区子ども・子育て会議条例に基づき、中野区子ども・子育て会議が審議します。当委員会は、中野区子どもの権利に関する条例に基づき、主に推進計画の各事業の取組内容について、子どもの権利の視点に基づいた評価・検証を行います。
- その他の計画部分についても、子どもの権利の視点に基づいた評価・検証は重要であることから、当委員会は、子どもの権利の視点から区の計画全体を総合的に評価・検証していくために、子ども・子育て会議とも連携しながら、相補的な評価・検証を行います。
- 毎年度、前年度に実施した取組に対して評価・検証を行い、次年度に向けた改善を図るとともに、計画期間である5年間の取組を評価・検証することにより、次期の計画策定に生かすことが効果的であると考えます。

#### 単年度の評価・検証

- 推進計画に基づく事業は、計画の目標Ⅰ「子どもの権利を保障し、子どものすこやかな成長を支援する」に記載されている事業が中心となりますが、目標Ⅱ以降に記載されている事業についても、子どもの権利に関わりが深い事業など、子どもの権利の視点から評価・検証を行う必要があると考えられる事業については、当委員会で抽出し、評価・検証を行う必要があると考えます。
- 区は、当委員会が評価・検証の対象とした事業について、子どもの権利の視点（以降に記載する（2）評価・検証における視点のとおり）に基づ

き自己評価を行い、課題や改善点を確認の上、その結果を当委員会が評価・検証する仕組みが有効であると考えます。当委員会では、区が取りまとめた評価結果について、子どもの権利の視点から改善が必要な点などに関してフィードバックを行うことにより、次年度以降の改善につなげることができると思います。

- 当委員会では、随時、様々な場面で子どもの声を聴き続けることで、区が取りまとめた評価に対して、子ども目線での検証を行います。

## 5年間の評価・検証

- 計画期間である5年間を通して区が行った取組に対して、子ども自身がどのように感じているかをヒアリングすることなどにより、定性的な評価を行うことが重要です。また、子どもだけでなく、学校の教職員や子ども施設の職員など、子どもに直接関わる大人に対してもヒアリングなどを行い、総合的に評価・検証を行う必要があります。（以降に記載する（3）子どもの意見を踏まえた評価・検証のとおり）
- 5年間の評価・検証の結果を踏まえて次期計画を策定することで、子どもの権利の視点に立った取組をより一層推進していくことができると考えます。

## (2)評価・検証における視点

- 「子どもの権利の視点」での評価・検証における視点の考え方

第10回で出た意見

- 「生きる権利」、「育つ権利」、「守られる権利」、「参加できる権利」の4つの軸に沿って評価する方法も一つ考えられる。

### (3)子どもの意見を踏まえた評価・検証

当委員会では、子どもの意見を踏まえた評価・検証について、以下のとおり整理しました。

#### 子どもへのヒアリング

- 子どもの権利の視点に基づいた評価・検証にあたって、行政の自己評価が必ずしも実際の子どもの意見や思いと一致しているとは限りません。
- 推進計画に基づく区が取組が子どもにどのような影響を与え、子ども自身がどのように感じているかを知るために、当委員会で随時、様々な場面で子どもの声を聴き続けるとともに、計画の最終年度において、子どもへのヒアリングなどを行い、子どもの意見や思いを知ることが重要です。
- 子どもへのヒアリング等を通して5年間の評価・検証を行うことで、計画に基づく事業の成果を測るとともに、次期計画の中で改善すべき点や課題を認識することができると考えます。
- 次期計画の策定にあたっては、子どもへのヒアリング等で得られた意見に対して可能な限り対応していく必要があると考えます。

#### 子どもと直接関わる大人へのヒアリング

- 推進計画に推進計画及び取組の評価・検証にあたっては、子どもの権利に関する理解が浸透することにより、普段子どもに直接関わる大人が子どもの権利の視点に立って子どもと接することができているかどうかを確認することが重要です。そのため、子どもへのヒアリングだけではなく、学校の教職員や子ども施設の職員など、子どもと直接関わる大人へのヒアリングを行うことも必要であると考えます。

#### 第10回で出た意見

- 評価・検証においても対話を大事にすべきである。第1期権利委員会では、学校に子どもの権利が息づいているかどうかという視点を大事にして、例えば評価に当たっての対話として学校という柱を入れてみることも考えられる。(学校の先生・保護者・子どもの3者との対話)  
→学校は地域の中にあり、地域も学校をつくっている。子どもと関わっている地域の方たちにもヒアリングを行った方が良いと思う。
- 計画の評価・検証とは別に、権利委員会としてテーマを設定して集中的に話を聴くというやり方も考えられる。

## < 付 属 資 料 >

諮問文、中野区子どもの権利に関する条例及び  
条例施行規則、名簿、開催状況などを添付予定